

現代俳句文庫 66 [武藤紀子句集]

飴山實に始まり宇佐美魚目「農」から長谷川權「古志」に依り研鑽を重ねながら満を持して結社<円座>を興した、武藤紀子の作品は、さすがにどれも格調が高いが、集400句の中に滑稽8作が見られる。

大男通草の山に入りゆけり

筆者は越後の落人村で究極の山奥の生れ育ちの故、通草を知り尽くしているが、武藤紀子も石川の金沢生まれと聞く。通草の実は、その形態から別名「山女(やまひめ)」と言い、「松茸」を男と見立てた戯れ唄も多い。大男が通草の藪へ分け入る図は正に滑稽である。

たった今蛤置きしことろ濡れ

「蛤」は女性そのものとして好き者同士の談話によく登場する。結語の「濡れ」が意味深。

足ばかり見えて声降る松手入れ

誰もが見る景ながら、こう詠まれると可笑しさが含まれる。此の足が女性の開脛なら嬉しいが。

穴惑松より落ちてしまひけり

冬眠準備で必死に穴を探す「蛇(くちなわ)」だが、何と松に登ってしまった愚かものである。

日雷古き畳に響きけり

ぱんぱんの新畳に響くなら当たり前の俳句。「古畳」だから意表をついた滑稽観が生まれた。

鶯替へてたましひを置き忘れけり

福岡太宰府・博多住吉神社・大阪道明寺そして亀戸天満宮などで行なわれる正月の神事。「開運・出世・幸福」を得られるため、どこも参詣客で賑わうが、何と魂を忘れるほどの熱い出会いがあったと言う。

名月や大津絵の鬼動き出す

嘗て、近江の国、大津追分の三井寺で売り出された民衆の礼拝用の戯画風仏画が「大津絵」、鬼の念仏、檜持奴、藤娘、瓢箪鯰、座頭と犬などだが、一般に滑稽感の「鬼」が第一人気。